TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A BAOA QU

トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0004

モビルスーツ戦闘編

TOYBOOK

モビルスーツの活用法
The utilizing method of mobile suit

モビルスーツにはさまざまな活用法があると考えられる。ただ、もともと一年戦争という舞台に向けて開発された“兵器”であるので、その主たる活用法は戦闘を行うということになるだろう。

モビルスーツの特筆すべき点は、ただ戦闘をするというだけでも、数々のバリエーションが考えられるという、その多様性である。例えば、RX-78ガンダムであれば、装備しているものがビーム・サーベルであるか、ビーム・ライフルであるかでその戦い方は大きく変わるし、単機で出撃しているのか、僚機を伴っているのかでも、また戦闘方法が変わってくる。モビルスーツの種類、数、装備する武器の組み合わせで、戦闘における活用法を無限に考えられるのである。“兵器”に対して不謹慎な言い方かもしれないが、そこにモビルスーツの面白さがあり、人々の心をひく魅力があるのだと言えるだろう。

これまでの巻ではモビルスーツの戦略的な位置付けや、モビルスーツのスペックに焦点を当てて検証してきた。本巻では、個々のモビルスーツが実際、どのように戦闘を行っていたのかを、ア・バオア・クー戦時の記録をもとに振り返って見たいと思う。

BATTLE 01
GUNDAM Vs ZEONG

激戦の幕開け

ルザル艦隊に編入されたアムロ・レイ少尉のRX-78“ガンダム”は、密集隊形を取るMS部隊の先頭を切る形でア・バオア・クーのSフィールドに進攻した。一方、80％の完成度ながらも実戦に耐えうると判断されたMSN-02“ジオング”はシャア・アズナブル大佐に受領され、Sフィールドの防空MS部隊に配備された。この時点でSフィールドの地球連邦軍艦隊に第13独立部隊が編入されていたかどうかを、Sフィールドの指揮に当たっていたキシリア・ザビ少将が察知していたかどうかは定かではない。しかし、ニュータイプの戦術的価値に敏感だった彼女が、ニュータイプ的な戦果を挙げるRX-78に対して同等の戦力を充てるべきと考えていたことは確かである。MSN-02は第34MS隊の中核としてSフィールド防衛の任に当たり、一年戦争を代表するエースパイロット同士の戦いの幕が上がることとなった。

ファーストコンタクト

U.C.0079年12月31日09時頃（正確な時刻は不明）。Sフィールドに出撃したMSN-02は、ルザル艦隊の艦砲射撃を避けつつこれに接近。第34MS隊の僚機とともに数隻の地球連邦軍艦艇を撃沈する。一方のRX-78は、ルザル艦隊から発進したMS部隊に交じってア・バオア・クーへの接近を図っていた。この動きを察知し、正確にRX-78を（正確にはアムロ少尉の存在を）捕捉したシャア大佐は、サイコミュ兵器によるオールレンジ攻撃によってRX-78を迎撃しようと試みる。しかし、RX-78はこの攻撃をかわし、MSN-02との交戦に固執することなくなおも前進を続けた。さらに09時2S分、ギレン・ザビ総帥の暗殺という事件が起こり、一時的にジオン公国軍の指揮系統が乱れた。その混乱に乗じて地球連邦軍が攻勢を強めたため、MSN-02は敵MS部隊に進路を阻まれ、RX-78を見失ってしまう。再びMSN-02がRX-78を捕捉したのは、ルザル艦隊のMS部隊がア・バオア・クーに取り付きつつある頃であった。

BATTLE 01

BATTLE 02
GUNDAM VS ZEONG

本格的な交戦

ルザル艦隊のMS部隊とともにア・バオア・クーに取り付きつつあったRX-78だったが、再びMSN-02に捕捉されたことにより、本格的な交戦を余儀なくされる。腕部有線誘導メガ粒子砲によるオールレンジ攻撃を駆使するMSN-02に対して、RX-78はビームライフルで応戦した(出撃時に携行していたハイバーバズーカ2基はすでに残弾が尽きていたものと思われる)。ア・バオア・クー攻防戦におけるMSN-02の戦果とシャア・アズナブル大佐の技量(ニュータイプ能力ともとれる)は、地球連邦軍艦艇4隻、MS18機を撃破したという記録から見てもめざましいものであったことは確かである。まさに鬼気迫るという表現が相応しいMSN-02の攻撃をRX-78が凌ぐことができたのは、アムロ・レイ少尉が攻防戦直前におけるMAN-08"エルメス"との交戦でオールレンジ攻撃を経験していたということも影響していたのかもしれない。しかしながら、RX-78もMSN-02に対して大きな打撃を与えることはできずにいた。まさに両者の実力は伯仲していたといえよう。

オールレンジ攻撃の無効化

その均衡は、RX-78が一瞬の隙を突いてMSN-02の懐に飛び込み、オールレンジ攻撃を封じたことにより崩れることとなる。母機に密着することによって誘導砲台からの射撃を抑止するというアムロ・レイ少尉の戦法が、経験によるものなのか直感的な発想なのか、推し量る術はない。しかしながら、予想しえないRX-78の行動に隙を見せたシャア・アズナブル大佐は、一瞬とはいえ遅れをとることとなった。RX-78はMSN-02に接近した瞬間、その左腕部を破壊。これをなんとか振り払い、RX-78の左腕をシールドごと吹き飛ばしたMSN-02だったが、その直後に右腕部メガ粒子砲も破壊され、胴体部にも直撃を受ける。ニュータイプ能力をも含めたパイロットとしての実力の差が、徐々にシャア・アズナブル大佐を追い詰めつつあった。MSN-02は一時ア・バオア・クー表面に退避し、RX-78もそれを追尾してア・バオア・クーに接近する。これと時を同じくしてルザル艦隊の一部がア・バオア・クー上陸に成功、戦況は地球連邦軍の優勢に傾いていくこととなる。

▶▶▶BATTLE 0

BATTLE 03
GUNDAM Vs ZEONG

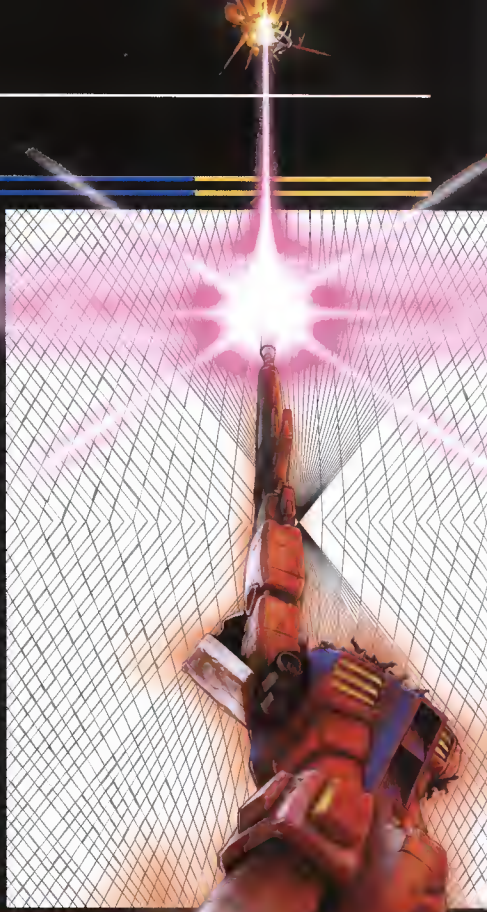
待ち伏せるMSN-02

RX-78の追撃を振り切ってア・バオア・クー表面に着陸したMSN-02だったが、主兵装である腕部メガ粒子砲を破壊され、その火力は大幅に低下していた。そこでシャア大佐は、要塞表面の複雑な地形を利用してRX-78を待ち伏せ、不利な状況の打開を図った。一方、RX-78はア・バオア・クーの防空MS部隊を排除しつつ要塞表面に接近していた。上陸しつつある地球連邦軍に対して防空MS部隊の抵抗は激化していたものの、RX-78の進攻を阻むには至らず、RX-78はMSN-02が伏せるエリアへと近づいていった。その動きを察知してRX-78を射程に捉え、腹部のメガ粒子砲で狙撃しようとしたMSN-02だったが、RX-78はこれを回避して逆に要塞の陰からMSN-02に接近する。なお、MSN-02は要塞表面に着陸してからこの時点まで、まったく移動していない。ここまでのRX-78との交戦による被害で、推力を失っていた可能性も否定できないだろう。

アムロ・レイ少尉のアドバンテージ

オールレンジ攻撃を封じた一瞬から、両者の戦闘における主導権はRX-78の側にあったといっても過言ではないだろう。この局面においてもそれは同様であり、不意打ちを仕掛けたはずのMSN-02は逆にRX-78を見失い、要塞の陰から急接近したRX-78に胴体部分を撃ち抜かれることとなる。しかしながら、爆発する機体から頭部コクピットで脱出したシャア・アズナブル大佐は、頭部メガ粒子砲でRX-78の頭部を破壊、要塞内部に逃げ込んだ。ちなみにこのときのアムロ・レイ少尉には、胴体にある(はずの)コクピットを破壊する意図があったと思われる。MSN-02の胴体を撃ち抜いた瞬間の戦闘記録に残されていた「逃うか！」という言葉からも、それは明らかであろう。この混乱した戦場で、シャア・アズナブル大佐ほどのパイロットを相手にしてなお、コクピットへの狙撃を試みることができるほどの精神的なアドバンテージをアムロ・レイ少尉が握っていたという証といえる。結果としてはその試みは失敗し、RX-78はMSN-02の頭部を追跡して要塞内部へと進入していった。

BATTLE 04
GUNDAM Vs ZEONG



ラストシューティング

MSN-02の識別信号は胴体部が破壊された時点で解除され、司令室では同機が撃墜されたと認識された。この報を聞いたキシリア・ザビ少将は「赤い彗星も地に落ちたものだな」と吐き捨てたと伝えられている。これはMSN-02とシャア・アズナブル大佐に対する期待への裏返しとも取れる言葉であったといえるだろう。事実、この直後にキシリア少将はア・バオア・クーの降伏と自身の脱出を決断している。しかしながら、彼女の計り知れないところでRX-78とMSN-02の戦闘は続けられていたのである。

ア・バオア・クー内部に進入したアムロ・レイ少尉は、MSN-02が再び待ち伏せていることを察知し、RX-78を自動操縦に設定してMSN-02頭部への攻撃を行わせた(アムロ・レイ少尉はこの攻撃の直前にRX-78から降りている)。シャア・アズナブル大佐もまた同様の操作でRX-78を攻撃させようとしていた。要塞通路の上方にMSN-02の頭部コクピットを捉えたRX-78はビームライフルの自動攻撃でこれを破壊するが、同時にMSN-02の頭部メガ粒子砲がRX-78の右半身を直撃し、RX-78も同じく撃破される。一年戦争を通じて連邦軍の象徴として戦い抜いてきたMSがその役目を全うした瞬間であり、ジオンの名を冠したジオン公国軍最後のMSが戦火に沈んだ瞬間でもあった。この戦闘は、ア・バオア・クー攻防戦全体から見れば、あくまで一MS同士の戦闘でしかない。しかし、一年戦争の幕引きを担った象徴的な対決であったともいえるだろう。

GUNDAM Vs ZEONG

BATTLE

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クーレポート

VOLUME 0004

モビルスーツ戦隊編

モビルスーツ戦闘概論

モビルスーツ誕生の土壌となったミノフスキー物理学

モビルスーツ（以下MS）という兵器の前提にあるのが、ミノフスキー物理学の成立である。トレノフ・ミノフスキー博士が提唱したミノフスキー物理学とミノフスキー粒子は、従来の兵器体系を根底から覆した。高濃度のミノフスキー粒子下では電磁波が乱反射するため、レーダーを用いた遠距離索敵やそれを用いた誘導兵器の使用、遠距離通信が困難となる。さらに、ミノフスキー粒子によって発生する電子回路の誤作動や機能障害は、それを保護するために非常に高価で大規模なシステムを必要としていた。ミサイルなどの精密誘導兵器にそうしたシステムを組み込むことは、費用対効果の面で不可能だった。こうした背景から、従来からある早期索敵と精密誘導兵器による戦術が無効化され、有視界領域における近接戦闘に対応した戦術と兵器が求められることとなる。その模索のなかから生み出されたのが、MSという革命的な兵器だったのである。

戦術を一変させたMSの優位性

MSが主流となったのにはさまざまな理由がある。そのもっとも大きな要因が、人型故の汎用性である。マニピュレーターは各種作業を可能とすると同時に多様な携行兵装の携行と使用を実現し、歩行ユニットは複雑な地形での移動に対応することができた。さらに宇宙空間においては、四肢を動かすことによる反作用を利用した姿勢制御システム“AMBAC”（Active Mass Balance Auto Control System）の存在がMSの優位性を不動のものとした。旧来の宇宙戦闘機が180度の方向転換を行おうとした場合、減速と方向転換に大量の推進剤を消費するために稼働時間が極めて短くならざるをえなかった。これに対してMSは、AMBACシステムによって推進剤を消費せずに方向転換が可能であり、大幅に稼働時間を延長することができた。また、宇宙空間に漂う隕石などの障害物を“蹴る”ことで推進力を得ることも可能だったのである。これらの点によって、MSは近接戦闘を要求されるミノフスキー粒子下での戦術に急速に浸透していった。

宇宙空間におけるMS戦闘：射撃戦

宇宙空間における戦闘では、視界を遮る障害物が少ないために遠距離から敵機を視認することが可能である。MS同士の宇宙戦では、基地なり母艦からの誘導によってそこからお互いに射程距離まで接近し、射撃戦に移行するケースが多い。大抵の場合は、密集陣形で射程距離まで接近したのち、散開して敵機と交差、ある程度の距離を保ったまま相対速度を合わせて射撃戦が行われる。相対速度が大きければ命中精度が落ちるのは自明の理だが、接近する敵機の目前で減速することは自殺行為ともいえる。一旦敵機と交差することが多いのは、そのためである。ホワイトベース隊（以下〈WB〉隊）のMSパイロット、カイ・シデンはある戦闘において、敵機に接近する前に遠距離からの狙撃を試みた僚機に対して「早い！　早いよ！　こういう時、あわてた方が負けなのよね」と洩らしたといわれている。実戦経験によって培われた彼のパイロットとしてのセンスを示すエピソードといえるだろう。

宇宙空間におけるMS戦闘：格闘戦

行動半径に限界がない（大気圏近くでは異なるが）宇宙戦では、敵機との距離を保つことが容易なため、多くの場合で射撃戦によって戦闘の勝敗が決する。もとより、慣性の法則が働く宇宙空間では、MS同士が格闘戦を行える距離まで接近すること自体が非常に困難なのである。しかしながら、一たび接近さえしてしまえば、格闘戦用兵器は威力が高く任意の箇所を狙うこともできるため、射撃武器に比べて敵機に致命的なダメージを与えやすいといえる。そのため、技量に秀でたパイロットならば、意図して格闘戦を挑むことも多かった。また、混戦状態の戦闘空域ではMS同士のニアミスが起こりやすく、そのまま格闘戦になることも珍しくはなかった。一年戦争最大の激戦と称されるア・バオア・クー攻防戦でもこうした状況は多く見られ、ジオン公国軍のMS-06に蹴り飛ばされた地球連邦軍のRB-79がRGM-79に直撃して誘爆する、などという珍しいケースも発生したのである。

地球連邦軍におけるMS戦法

地球連邦軍のMSについては、試作機であるRXシリーズと量産型MSシリーズの間に大きな隔たりがある。RXシリーズが部隊運用までも含めたトライアル機の性格が強いMS群であるのに大して、量産型MSは戦術の中核となる主力兵器として大量配備されることを前提としていたためである。そのため、戦闘局面における両者の扱いも大きく異なっていたことが多い。

周知の通り、初期のRXシリーズの三種は結果的に民間人や士官候補生によって構成された〈WB〉隊によって運用された。正規兵が受けるはずの訓練を受けていない者がほとんどの中で、彼らはMSを用いた戦闘を独力で模索していくしかなかったのである。そのためか、〈WB〉隊のMS戦術は非常に独創的なものが多かった。RXシリーズが機能特化に重点を置いたMS群であったことも、その要因のひとつであったといえるだろう。〈WB〉隊のMS部隊が用いた戦闘スタイルは、RX-78の働きに依存するところが大きかった。RX-78が汎用性に優れたMSであったこと、パイロットのアムロ・レイ少尉が突出した能力を持っていたことがその理由であろう。RX-78が部隊の核となって敵機を撃破し、RX-77やFF-X7(Bst)は近・中距離からその支援を行う、というケースが多く見られる。逆に、RX-77などが陽動部隊として敵を引きつけ、RX-78の動きを隠蔽するといった戦闘も記録には残っている。いずれの場合も、RX-78の働きが戦闘の勝敗を決定付けていたことがほとんどであった。

一方、〈WB〉隊以外の一般的なMS部隊は、数の優位によって公国軍を圧倒するという基本的な戦略の元に編成され、戦法も編み出されていった。そのなかで生み出されたものが"集団戦法"(グループ戦法とも呼ばれる)といわれる戦い方である。これは、12小隊からなる1中隊規模のRGM-79が、10～20小隊のRB-79と共同で作戦を遂行するというものであった。RGM-79が近距離戦闘を、RB-79が中・遠距離支援を担当するというこの戦法は、ソロモン攻略戦やア・バオア・クー攻防戦で使われ、戦果を上げている。地球連邦軍がこうした戦法を採った背景には、RGM-79が予定された性能を発揮できなかったという事情もあった。戦いにおいて物量はそれ自体が力であるが、逆にMS単体の性能が劣る地球連邦軍としては、物量を投入してそれを前提とする以外に道を持たなかったのである。

ア・バオア・クーにおける地球連邦軍MSの動き

「ロモン攻略戦とア・バオア・クー攻防戦での地球連邦軍MS部隊が"集団戦法"を用いたことは前述の通りである。 の戦法で重要となったのは、戦闘部隊の基本単位を中隊規模に拡大することであった。そのため、MS部隊は基本的に密集陣形を組んで作戦に当たった。ア・バオア・クー攻防戦の戦闘記録では、横列陣形を組んで前進するRGM-79とRB-79の大部隊を見ることができる。また、この攻防戦では特にRGM-79とRB-79の戦闘分担が明確に分けられていたようで、記録映像からはRGM-79とRB-79の混成部隊はほとんど確認することができない。先鋒を務めるRGM-79部隊が敵機と接触してこの突破を試み、RB-79部隊は後方から支援射撃を行うという戦術は、ある程度構築していたと考えられる。ただし、攻防戦序盤は連邦軍の劣勢で進んでいたこともあり、RGM-79部隊を突破した敵機をRB-79部隊が各個に迎撃するという場面も見られた。

地球連邦軍が想定したMS部隊編制

地球連邦軍の"集団戦法"において、1小隊は3機のRGM-79(ないしはRB-79)で構成されていたことが明らかになっている。しかしながら、地球連邦軍が当初想定していた宇宙軍のMS小隊は、5機編制であったとされている。その内訳は、隊長機であるチューン型RGM-79(通信、指揮装備を拡張されたもので、予備のビーム・サーベルを装備していたことから"2本差し"とも呼ばれる)×1、通常型RGM-79×3、中距離支援用のRGC-80×1となっていた。このように編制された小隊を基本単位として、予測しうる状況に柔軟に対応できる部隊編成を目指したと考えられる。また、MSを歩兵的に運用することを考慮して、1小隊を5機で編制しようとしたともされる(歩兵によるパトロール隊は4人が一般的で、これに隊長機が加えられた)。しかし現実には、支援用MSの配備の遅れやRGM-79の性能面の問題などから、"集団戦法"を前提にした部隊編制が進められていくこととなる。

多岐に渡るジオン公国軍のMS戦法

MSを用いた戦法に関して、ジオン公国軍はU.C.0076年5月に設立した教導機動大隊において研究、訓練を重ねた。この教導機動大隊は史上初のMS部隊であり、MSを運用する基本的な戦法はこの部隊によって確立されたといっても過言ではない。つまり、MSをコロニー内でも運用可能な宇宙戦闘機と併わして部隊編制を行い、MS3機の1小隊を最小戦闘単位とする方式である。一年戦争における戦闘記録には、ジオン公国軍のMS部隊が小隊規模で作戦行動に当たる様子が多く見られる。代表的な例としては、ガイア、マッシュ、オルテガの3人で構成されたエース・パイロット・チーム"黒い三連星"が挙げられる。彼らは3機による連携戦法"ジェット・ストリーム・アタック"を駆使し、ルウム戦役などで大きな戦果を上げたことで知られている。また、史上初のMS戦として有名なサイド7運過戦においてRX-76と交戦した偵察部隊も、MS-06の3機小隊であった。そのようなMS運用を支えたひとつの要因は、ジオン公国軍パイロットの熟練度の高さにあったと考えられている。前述の"黒い三連星"や"赤い彗星"シャア・アズナブル、"青い巨星"ランバ・ラルなど、その名を知られるジオン公国軍のエース・パイロットを挙げれば枚挙に暇がない。早くからMSの有用性に着眼し、パイロットの育成に力を注いできたジオン公国軍には、彼らに代表されるような優れたMSパイロットが多かったのである。そうした背景が、小隊規模という少ない戦力での作戦行動を実現していたといえるだろう。また、MSの汎用性を活かした特務部隊（"黒い三連星"も一種の特務部隊といえる）が多く存在し、それらの部隊がゲリラ戦術を得意としていたことも、ジオン公国軍のMS戦法の特徴のひとつである。

このように、ジオン公国軍は小隊単位で部隊を運用することが多かったが、戦闘の規模が大きくなる場合には12小隊で1中隊36機編隊を構成した。一年戦争末期のソロモン攻略戦、ア・バオア・クー攻防戦のような戦局では、MS部隊は中隊規模を基本に運用されていたと考えられている。ただし、余剰戦力などの事情によって変則的な編制がなされることも少なくはなかった。例としては、12機のMS-06Rによって構成されていたコンスコン機動艦隊のMS部隊がある。基本としては前述の小隊、中隊編制があったものの、前線指揮官の判断によって臨機応変に運用されていたことの表れといえるだろう。

ア・バオア・クー攻防戦におけるジオン公国軍MSの動き

ア・バオア・クー攻防戦はジオン公国軍最後の大規模戦闘となった。序盤にMS部隊を温存したジオン公国軍は、Sフィールドから地球連邦軍ルザル艦隊が進攻し始めた時点でようやくMS部隊を投入している。Sフィールド防衛の核となったのは、MSN-02を前面に押し立てた第34MS隊であった。この部隊は、各小隊がトライアングル編隊（3機が三角形の頂点となる編隊）を組み、密集陣形で進攻するルザル艦隊を迎撃した。その記録映像からはMS-06とMS-09Rの部隊が確認できるか、機種ごとに小隊が編制されていたようでMS-06とMS-09Rの混成小隊はほとんど存在していなかったようである。一方、NフィールドのMS部隊はMS-14を中心に構成されていた。これらのパイロットの多くが学徒動員の兵士たちであり、その練度の低さがア・バオア・クー陥落の一因となったことは周知の事実である。混戦状態に対応しきなかった彼らが、組織的な戦闘行動を行えなかったのではないかと推察できよう。

攻防戦終盤の防戦と混乱

地球連邦軍部隊のア・バオア・クー上陸を許したキシリア・ザビ少将は、敵を要塞内部に誘い込んで殲滅にする戦術を採った。その時点で攻防戦は白兵も含めた陸戦に移行し、ジオン公国軍のMS部隊は地の利を活かして連邦軍部隊を迎撃しようと試みた。網の目のように走る要塞の通路をトーチカのようにして防戦を行った公国軍MS部隊は、要塞表面に接近した〈WB〉を掴坐させるなど、一時的にではあるが連邦軍部隊の足止めに成功している。しかしながら、徐々に劣勢に追い込まれた公国軍部隊には指揮系統の混乱も発生し、キシリア少将が脱出を図ろうとした際にはその護衛にMSを回す余裕もなかった。キシリア少将の脱出艦が護衛機にMS-09R中隊を要求したものの、MS-06さえも調達できなかったといわれるほど、攻防戦終盤のジオン公国軍MS部隊は切迫していたのである。最終的に投入されたMSの8割以上が帰還を果たすことができなかったという事実も、その惨状を示すものといえる。

ア・バオア・クー攻防戦においても、RX-78"ガンダム"は地球連邦軍MS部隊のシンボル的な存在として活躍した。ルザル艦隊の一翼を担った第13独立部隊の一員としてSフィールド攻撃に参加し、MSN-02と交戦しながらも艦隊の防衛ライン突破とア・バオア・クー上陸に貢献している。この時点でのアムロ・レイ少尉のニュータイプ能力を鑑みても、一般のジオン公国軍兵士たちがRX-78に対抗することはほぼ不可能であったことは確かであろう。事実、今日確認されている戦闘記録映像にあるRX-78の交戦シーンでは、シャア・アズナブル大佐のMSN-02を除いては、ほとんど被弾することもなく敵機を撃破している。MSN-02に左腕を破壊されるなお、ビーム・サーベルを用いずにキックでMS-09Rを撃墜するなど、その突出した戦闘力は攻防戦に参加したすべてのMSの中でも特に際立っている。

また、出撃時にはシールドとビーム・ライフルのほかにハイパー・バズーカ2基を携行していたが、これは母艦に帰還することが困難だと想定した上での装備だったと考えられる。最終的にはMSN-02との交戦の末に大破し、ア・バオア・クー降落時の火災によって残骸も焼失することとなる。しかし、コア・ファイターは無事に残り、アムロ少尉が要塞から脱出する際に用いられた。パイロットの生存性と戦闘データの回収を重視したコア・ブロック・システムのコンセプトが活用された最初で最後の例といえるだろう。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

Battle scene in A BAOA QU

ア・バオア・クー戦で活躍したRX-77ガンキャノンとして知られるのが、カイ・シデン少尉機＝C108と、ハヤト・コバヤシ曹長機＝C109（実機はRX-75ガンタンクであったとする説もある）である。この2機は、ルザル艦隊・第1大隊の中核となった<WB>隊（第十三独立戦隊）所属の機体で、同艦隊指揮下のMS部隊と共にア・バオア・クーのSフィールド攻略に投入された。アムロ・レイ少尉のRX-78ガンダムが遊撃機的な戦闘を行なったため、艦艇的な戦いはこの2機に任されたとも考えられよう。

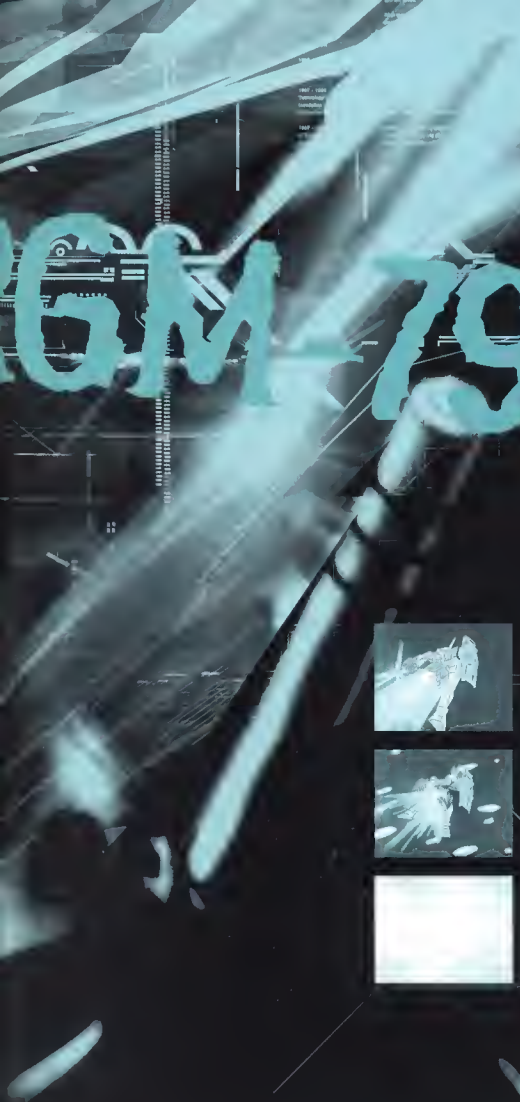
C108とC109は、ルザル艦隊のMS部隊と共に敵MS部隊を排除しつつ、手薄となっていたSフィールドのメインゲートにたどり着き、ア・バオア・クーへの機動堡の確保に大きく貢献する（ア・バオア・クー戦開始時、連邦軍がNフィールドに殺到したため、Sフィールドの主な戦いの半数はNフィールドへ振り向けられていた。キシリア少将はSフィールドへ、シャア・アズナブル大佐のMSN-02ジオング率いるMS部隊を向かわせるが、<WB>隊MS部隊の上陸は防ぎ切れなかった）。

しかし、この時と同時に両機の母艦である<WB>隊左舷メイン・エンジンの爆発により、ア・バオア・クーのゲートに衝突。さらにアームの右エンジンも失ったため、<WB>隊は完全に行動不能に陥り、艦艇部隊の収容を困難なものとなる。両機を援護するため、C108とC109の母艦からの収容に間に合うボートで戻ることになってしまう。この状況においても充実した火力で多くのMSを撃破したガンキャノンであったが、行動が制限される上に敵との距離が著しく近くなるゲーム内での戦闘により、C109が頭部付近に被弾、大破、炎上してC108もまたMSの襲撃により右脚部を失ったため、破棄された。なお、パイロットのカイ少尉とハヤト曹長は無事に脱出している。

余談ではあるがア・バオア・クー上空戦闘ではC108やC109と共に戦う所属機体不明のC203ナンバーガンキャノンが確認されている。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

at[illegible]cene in A BA[illegible]A QU



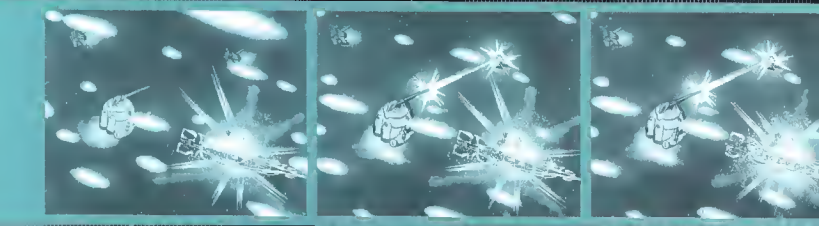
ソロモン戦に続いてア・バオア・クー攻防戦においても地球連邦軍の主力MSとして投入されたのが、RGM-79ジムである。RGM-79はガンダムの戦闘データを基に、対MS戦能力や用兵側の諸性能をバランスよく取り込んだ量産MSである。「可もなく不可もない」とも評価されることがあるジムだが、ビーム兵器の実装などによって、リック・ドムやザクⅡと互角以上に戦える優秀な機体であったことは間違いない。また、一年戦争末期のジオン公国軍が3種類の量産MS（ゲルググ、リック・ドム、ザクⅡ）を配備していたのに対し、地球連邦軍は主力MSをジム・シリーズ1本に絞っていたため、機体の保守・整備性や生産効率の面では、地球連邦軍が一歩リードしていたと考えられる。

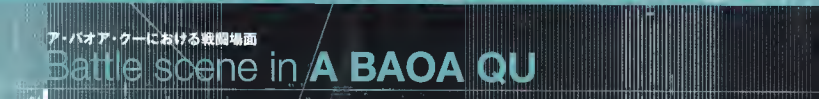
このようにハードウェア面ではジオン公国軍に肩を並べた地球連邦軍であったが、MS運用システムに関しては必ずしもそうではなかった。当時の地球連邦軍は、ホワイトベース級に代表されるMS運用母艦や、MS搭載能力を付加した艦艇が少なかったため、各種艦船の外部に機体を艦出した状態で乗せられていたRGM-79も多かったようだ。これはごく一部の例外を除き、ジオン公国軍のほぼ全ての艦艇にMS格納能力があったことと対称的であった。

ア・バオア・クー戦におけるRGM-79は、地球連邦軍の主力MSとして第1～第3までの全大隊に配備されていた。Nフィールドでの地球連邦軍のビーム撹乱幕の展開と、ア・バオア・クーからのミサイル攻撃などされた直後、第2、第3大隊のRGM-79は、迎撃に出てきたジオン公国軍MS部隊との戦闘に突入する。この戦闘でRGM-79はジオン公国軍のMSであるゲルググやビーム・サーベルの一撃でMS-09Rリック・ドムを撃破した記録もあるが、ララサイドロスを中核とした公国軍の猛攻を攻めあぐねに損害を出し続けた。この状況に変化が訪れたのが、第1大隊のSフィールド突破だった。これにより、N及びSフィールドから多数のRGM-79がア・バオア・クーに上陸、戦況は地球連邦軍に有利に展開していくことになる。

ア・バオア・クーにおける戦闘風景

Battle scene in A BAOA QU





ア・バオア・クーにおける戦闘場面

Battle scene in A BAOA QU

9

MSN-02"ジョニー・ライデン"にとって、ア・バオア・クー攻防戦は、宇宙で最後の戦場であった。ジャベリン・ダブル大佐最後の乗機として、8機の撃墜度でありながらも多大な戦果をあげた一年戦争のジオン軍MS史上トップの名を深く刻み込んでいる。無論、注すべき戦闘はRX-78との交戦であるが、それ以外の局面においても大きな戦果を残した。特に第34MS隊を率いてルザル艦隊の迎撃に当たった最初の交戦では、胸部メガ粒子砲の一斉射撃でフェーン級大型巡洋艦など、その性能を如何なく発揮している。最終的にア・バオア・クー攻防戦全体を通じてMSN-02が残した撃墜スコアは、艦艇4隻、MS18機にも及ぶ。わずか3時間ほどの実戦参加でこれだけの戦果を挙げたことは驚嘆に値する。

しかしながら、最大の特徴である有線誘導メガ粒子砲によるオールレンジ攻撃は、ことごとくRX-78に回避されていた。ただし、これについては回避したアムロ・レイ少尉を賞賛すべきであろう。一年戦争屈指のニュータイプといわれるアムロ・レイ少尉だからこそ、MSN-02のオールレンジ攻撃を回避しえたともいえるのである。結果として、MSN-02はRX-78と相打ちになって撃破されることとなった。しかし、それまで無敵を誇り、数多のエースパイロットとMSを退けてきたアムロ・レイ少尉のRX-78を撃破した戦果は、撃墜スコアにも勝るMSN-02最大の戦果として評価されるべきであろう。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

Battle scene in A BAOA QU

N-02

実戦投入から一年近くを経過し、性能不足を露呈し始めていたMS-06Fザク‖ではあったが、**ア・バオア・クー戦にも相当数が投入されている**（F型以外のザク‖も投入されていたと考えられるが、詳細不明）。

ア・バオア・クー戦時でのMS-06Fの具体的な配備数は確認できていないが、記録映像を見る限り、ジオン公国軍戦力の**半数近くはMS-06Fタイプ**であるように感じられる。特に要塞表面付近にMS-06Fの姿が多く見られ、防御的な運用が行なわれていたようである。これは、MS-14ゲルググやMS-09Rリック・ドムと比較した場合、直接的な戦闘能力・推進力で劣っていたため、迎撃機的な戦い方は難しいと判断されたためと推測される（高い推進力を活かした一撃離脱戦法はMS-09Rが得意とする所だった）。

ジオン公国軍の最前線を支えた空母ドロスにもMS-06Fは配備され、Nフィールドでの戦闘に貢献しているが、この場合は地球連邦軍艦隊との距離が比較的近かったため、MS-06Fの弱点は問われにくかったのだろう。それでも、基本的にはMS-09RとMS-06Fがチームを組むことはなく（機動力が違うのだから当然ではある）、各々別は同機種で構成されていた（これはRGM-79とRB-79の混成部隊が多かった地球連邦軍とは対称的な構成である）。Nフィールド迎撃戦や要塞上層戦などの混戦では、この戦列も崩れざるを得なかったようだが……。

しかしこの混戦が、MS-06Fと他のMSとの性能差を穴埋めしたようで、Sフィールドのゲートで対（WB）隊戦を展開したあるMS-06Fは、カイ・シデン少尉のガンキャノンC106を行動不能に落し入れるという金星を上げている。もっとも、このMS-06Fも命中弾を与えた直後、C108からの砲撃により破壊されたため、実戦投入以来ジオン公国軍に煮え湯を飲ませ続けた、RXシリーズの1機を倒したパイロットの名前は不明のままである。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

Battle scene in A BAOA QU

ア・バオア・クーにおける
Battle sc A BAOA QU

MS-09R

MS-09Rは、陸戦用MS「MS-09ドム」を空間戦仕様に改修した量産機で、多数の熱核ロケットエンジンの搭載と重装甲による耐弾性、そして360mm口径のジャイアントバズによる大火力を持つ強力なMSであった。その仕様から分かるように、基本的な運動性を犠牲にした格闘戦ではなく、一撃離脱＝ヒット・アンド・アウェイを重視した機体であると推測されており、MSというよりMAに近い特徴を持っていた。

ア・バオア・クー戦において、MS-09Rを装備した母艦、部隊として知られるのが、空母ドロスとキュベレイ少将の命令でNフィールド防空戦を展開した第34MS部隊である。

ア・バオア・クー戦開始直後に最前線となったNフィールドの迎撃戦で、先鋒を務めたのが空母ドロスに配備されたMS-09Rであった。Nフィールドのジオン公国軍は、MS-09R単機種で構成された戦列を前面とし、その後にMS-06Fで構成された戦列を配置していたようである。これは、MS-09R部隊の一撃離脱戦法による先制攻撃で、地球連邦軍の編制を混乱させ、その後にMS-06Fによる波状攻撃を仕掛けることで、地球連邦軍に消耗を強いる意図があったと考えられる。MS展開のタイミングの問題からか、Nフィールドでの激しい迎撃になり始めたが、地球連邦軍の第2、第3大隊は混乱のきわみ、戦力を削ぎ取られていく。この戦闘で、マゼラン級戦艦にダメージを与えたのもMS-09Rであった。

しかし、Nフィールドに戦力を集中させたため、手薄になっていたSフィールドを地球連邦軍第3大隊が攻撃。この防衛に当たったのが第34MS部隊である。高推力を持つMS-09Rは、短時間でSフィールドの防衛に最好適任だが、[illegible]の部隊はア・バオア・クーに向かいつつあった（撤収になりつつあった）ため、MS-09Rはその性能を[illegible]することができなかったようである。

なお、ゲート内で撤収中のWBの右エンジンを破壊し、その[illegible]をしたのはMS-09Rのジャイアントバズであった。

MS-14

ジオン公国軍最後の量産MSとして知られるのがMS-14ゲルググである。MS-14は、それまでのジオン公国軍量産MSが装備不能であった、ビーム・ライフルやビーム・サーベルを実装する高性能量産機として開発されていたが、生産が遅延し続け、大規模配属はア・バオア・クー戦までずれ込んでしまう。それでも、MS-14の数は不足しており、一年戦争末期のジオン公国軍の実質的な主力MSがMS-06FとMS-09Rであったことはよく知られている。実際、ア・バオア・クー戦の記録映像を見ても、MS-14の姿は数えるほどしか確認できず、MS-14が配備された部隊の記録も少ない。

さらに問題なのは、MS-14のパイロットの多くが臨時徴用された学徒兵だったため、RX-78ガンダムに匹敵すると言われる性能を十全に発揮できなかったことである。Sフィールドに展開していたMS-14は、セイラ・マス少尉のコア・ブースターに容易に撃墜された例がそのことを物語っている。ア・バオア・クー戦後半のジオン公国軍司令キシリア・ザビ少将も、MS-14の戦果が芳しくないことに不快感を隠さなかった。

しかし、ア・バオア・クー戦で活躍したMS-14がなかった訳ではない。その希少な例のひとつが、空母ドロワ(Nフィールドの中核艦ドロスの同型艦)の302哨戒中隊に所属していた"ソロモンの悪夢"アナベル・ガトー大尉(当時)が搭乗したMS-14である。グリーンとブルーのパーソナル・カラーを施されたガトー大尉のMS-14は、奮戦を続け多くの地球連邦軍機を葬っている。他にも、キシリア少将麾下のザンジバル級機動巡洋艦に所属していたパイロット達がゲルググ・タイプのMSを駆って、多大な戦果を残したと言われている。

なお、シャア・アズナブル大佐の赤いMS-14は、大佐がMSN-02ジオングで出撃したため、ア・バオア・クー戦では使われなかったようである(脱出時に、改修された専用ゲルググをシャア・アズナブル大佐が使用したという説もある)。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

e scene in A BAOA QU

Space fighter battle ship

地球連邦軍、ジオン公国軍ともに、ア・バオア・クー攻防戦にはMS以外の兵器を大量に投入していた。MSに比べればそれらが脚光を浴びることは少ないが、その戦果を軽視することはできないだろう。なかでも、地球連邦軍第13独立部隊所属のコア・ブースター006番機（パイロットはセイラ・マス少尉）はMSと対等に渡り合い、MS-14を撃墜するなどの戦果を挙げている。しかし、交戦中に被弾し装甲表面に不時着、行動不能となった。その一方で、ビーム撹乱膜の展開を目的にNフィールドの第2、第3大隊に配備されていたバブリク突撃艇は、ア・バオア・クーからのミサイル攻撃によって期待されていた効果を上げられず、攻防戦序盤における地球連邦軍の劣勢を招く一因となった。

ジオン公国軍は一年戦争後期に量産されたMSを中心に防衛戦力を編成していたため、MS以外の兵器は種類が少なかった。唯一、攻防戦以前から予備戦力としてア・バオア・クーに配備されていたガトル戦闘艇は、そのほとんどがNフィールドに回されて序盤の対艦戦にある程度の戦果を挙げた。これは、ア・バオア・クーからの対空砲火による援護があってこそのことであろう。ビーム撹乱膜の展開に失敗した地球連邦軍が止むをえず出撃させたMS部隊には圧倒されたものの、ギレン・ザビ総帥が意図したMSの温存に大きく貢献したのである。

ア・バオア・クーにおける戦闘場面

ア・バオア・クー攻防戦における地球連邦軍艦隊には、要塞内部への兵力展開を目的とした艦艇としての役割が存在したと考えられている。艦艇＝MS母艦としての運用は当然のことであったが、地球連邦軍は要塞内部への侵攻を第一に作戦を進め、艦隊をア・バオア・クー直掩に直接投入した。ア・バオア・クーのような要塞を攻略するためには、自軍戦力を要塞内部に投入して制圧することが効果的であったためである。一般的な考え方で地球連邦軍の艦艇は火力を重視した戦闘艦がほとんどであり、ビンソン計画によってMS搭載能力を持っていたものの、運用面では貧弱であった。そういった点で、ア・バオア・クー攻防戦における地球連邦軍艦艇の役割は、ほぼ固定した用途に限りなく近いものであったと言えるだろう。

一方、ジオン公国軍艦艇にとって、要となったのは、要塞防衛の中心となるMS部隊の支援であった。刻々と変化する戦況に対応しうる、移動可能なMS運用拠点としての性格が強かったと言える。その最たる例がドロス級の航空母艦である。Nフィールドの"ドロワ"とSフィールドの"ドロワ"を要塞防衛の核となっていたことは、前述の通りからも明らかといえる。もちろん、艦艇部隊が地球連邦軍艦隊を迎え撃つ主力であったことは間違ないが、ア・バオア・クーの堅固な防空システムに護られることができたジオン公国軍にとって、艦艇の役割がMS運用という面に比重を置いていたことも容易に推測できるのである。

ア・バオア・クー攻防戦における艦船の役割

The role of Vessel in A BAOA QU

ジムの本当の強さは？
――量産機ゆえの誤解

RGM-79ジムといえば、一年戦争において連邦軍を勝利に導いた立役者である一方で、その評価はいずしも高くないようである。曰く「ボール」曰く「特徴がない」、極めつけは「顔が弱そうだ」など。それらの評価は正しいのだろうか？

まず、ジムが「弱い」という評価については、スペックの上では、ジムとガンダムとの性能差は少ない。ジムとガンダムの違いといえるのは、運動性と運用性などの細かいところが多いのであって、具体的なデータが少ないのでここでは述べない。具体的にはガンダム＝ビーム・ライフル＋ルナ・チタニウム合金、ジム＝ビーム・スプレーガン＋チタン系合金となっており、ガンダムの方が火力、防御力の面で優れている。

「やはりジムは弱い」と思われるかもしれないが、ここで重要なのはジムがガンダムに対抗するために開発されたMSではないということである。ジムはあくまで、ジオン公国軍との戦いにおいて、ために開発された機体であり、ジオン公国軍の機体に負けなければいいのだ。実際に比較してみると、ジムは数値スペックの上ではゲルググに大きく水をあけられているが、ゲルググ相手にはパイロット不足であったことは否めないが、ゲルググの登場までに負けていないので、大きな問題ではないだろう（一対一の戦う必要性はないのだから、強い敵に対して1人当たりで互角を維持していれば）。

現実的な面でも、初期段階面でのビーム兵器の実用化によって、ゲルググやリック・ドムに対して比較的優位に立っている。また、初期段階ではシールドが基本装備されたため、被弾前に落ちていると考えていい。戦闘にはカタログ・スペックだけで測れない要素が多くあるのだ。

次は、ふたつめの批判である「特徴がない」ことについてである。ジムは「特徴がないことが特徴」と評されることがあるように、一年戦争以後の視点で見ると凡庸なMSだといえる。だが、一年戦争当時から見るとその評価は変わってくる。"ジムは「弱いのか？」"でも触れたが、一年戦争時のジムは多くのジオン製MSを凌駕するカタログ・スペックを持つ上、ビーム兵器すらも標準装備した。極めて先進的な機体であった一年戦争以後、ビーム兵器の装備が常識化したのち、ジムは"当たり前過ぎるMS"として低い評価を受けざるを得なくなってしまったのだろう。

また「特徴がない」ことは、ジムにとって同じ問題ではない、と言うより「特徴がない」ことこそが重要であることにも言及しておこう。というのも、ジムは汎用MSであり、広い用途に対応できることも重要であるからだ。特徴がある＝何かに特化したMSは、専門分野で高い性能を発揮できるが、汎用性は犠牲にならざるをえない（ゲルググ＝MS）。逆に汎用性を重視すると、特殊な性能はオプションや改造で対応することになるため、基本の仕様では特徴がなくなっていく傾向がある。つまり「特徴がない」とは、ジムの汎用性の高さを示す"誉め言葉"だとも考えることができよう。

そして、最後の「顔が弱そう」という評価についてである。この一点は評価は多分に感覚的なものであるが、ガンダムやゲルググなどの公国軍MSと比べた場合、確かにジムの顔だけでなくボディ全体も凹凸が少なく、迫力には欠けるかもしれない。

逆にジオン軍MSは、モノアイやスパイク・アーマー、大型のボディなど、心理的に敵にプレッシャーを与えるようなデザインが多いように見受けられる。

これはガンダムを徹底的に記号化して「正義」とした地球連邦軍と、ザクⅠ→ザクⅡ→リーザクⅢ型といったように装備や機体そのものを変更して行ったジオン公国軍との設計思想の差を物語っているように感じられる。このように考えると、ジムは「弱そう」なのではなく、「洗練された」と表現すべきかもしれない。

3つのジムに対する評価を検証して来たが、いかがであろう。本稿冒頭でも述べた通り、ジムはジオン公国軍を倒したMSであるといっても過言ではないのだが、その事実に反してジムの評価は低いようである。だが、ジムの後継機たちは、一貫して地球連邦軍の主力MSであり続けた。その事こそが、ジムが傑作であったの証左となっているのである。

RGM-79　ジム

（ハイパーバズーカ、シールド、
ラスト・シューティング再現用ガンダム右腕、ジオングダメージバージョン・ツノ付属）

合理性を極めた、時代の先端モデル

工業製品の場合、試作品が製品化されるにより外観デザインでも顕著な自己主張をする。このため、試作品は近寄りがたい存在という印象を与えがちだ。兵器も工業製品の一つであり、これに当てはまっている。一見すると無骨なカタチであっても、敵を求める際には機能を満たすために合理化によって滑らかなカタチへと変わるものだ。ただ、カタチから発する主張はおとなしくなっても、機能美という新たな側面を訴えるようになる。さらに、工業製品の外観デザインを眺めれば、そこに試作品のシルエットであり、パネルラインの跡を見ることが出来る。工業製品としてみれば、ジムはまさに時代の先端モデルだ。加えてコストパフォーマンスに優れた量産型ガンダムのカタチの裏には、ガンダムの開発過程で築き上げた技術の結晶であるモビルスーツという語らざる自己主張も隠れている。このカタチは、ガンダムを敵国とする国等を威嚇しながら、見つめて主張しているではないか。

Figure "R... Manual

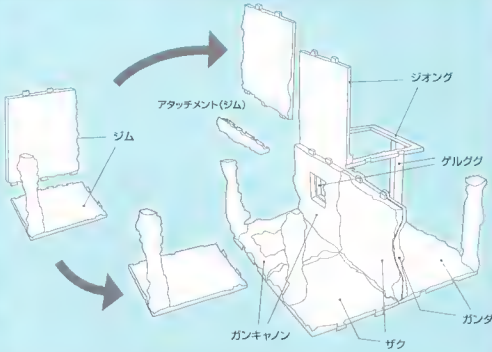
付属フィギュア解説　RGM-79　GM

研ぎ澄まされたカタチは美しい

ジムを意識させる最大の要素は顔。フィギュアの顔だけに顔入れが施されている理由は、これである。また、ガンダムの延長に位置するモビルスーツであるがために特徴が無いキャラクターというイメージが定着しているが、見方を変えれば、ガンダムよりも実戦用兵器としての色合いが強くなければならない。この解釈を表現するために、仔細なことかも知れぬが、胸のハッチの形状はTVの設定に準じながら、パネルラインを1本加えることでミリタリー性を強調している。また、試作段階から改良されているであろうとの想定から、腰回りのスカート、ひざ周辺の装甲等も兵器を感じさせるパネルラインを採用し、兵器然としたジムらしさを強調しているつもりだ。

また、コレクション上での存在感を持たせるために、ポーズは単なる素立ちではなく、バズーカを肩に構えた力強い格好にしている。ちなみにバズーカ及び上腕から手にかけてのパーツはカラーリングを変えればガンダムにも流用出来るので腕に自信のある方はトライしてみてはいかがであろうか。両者のカタチを重ねることで違和感の無い様を確認して欲しい。今回は交換パーツにラストシューティング再現用のガンダムの右腕と標的となったジオングのダメージヘッドを同梱している。コレクションをより深く楽しんで頂ければ幸いである。

●フィギュア・ベース写真は試作品を使用している場合がございます。仕様は製品向上の為、変更になることがございます。あらかじめご了承ください。



※壁の上下の向きは突起が二つある側が上向き、三つある側は下向きとなります。
※すべてのジオラマベースを結合する場合は、上図にあるように、ジムの壁と地面を分け、地面をガンキャノンの地面部分に、壁はジムに同梱されているアタッチメントを下に取り付けた上でガンキャノンの壁に接合します。

※Vol.002のガ[illegible]属[illegible]組み合わせると写真の[illegible]
※ガンダム本体[illegible]には付属していません。

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポートvol.4 ―モビルスーツ戦闘編―

モビルスーツの活用法

ガンダムVSジオング 4

モビルスーツ戦闘概論 12

モビルスーツ戦闘～地球連邦軍 14

モビルスーツ戦闘～ジオン公国軍 16

ア・バオア・クーにおける戦闘場面 18

RX-78 ガンダム 18

RX-77 ガンキャノン 20

RGM-79 ジム 22

R8-79 ボール 24

MSN-02 ジオング 26

MS-06F ザクⅡ 28

MS-09R リック・ドム 30

MS-14 ゲルググ 32

戦闘機、戦闘艇 26

ア・バオア・クー攻防戦における艦艇の役割 36

モビルスーツコラム ― RGM-79 ジム ― 38

付属フィギュア解説 40

次号予告 43

2004年3月25日発行 トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クーvol.0004

発行人 小松崎孝一 編集人 猪俣雄次 企画・編集 株式会社セイカ トイブック事業部

発行・発売 株式会社セイカ 〒101－0032 東京都千代田区岩本町2－8－8 栄泉岩本町ビル 電話：03－5820－3745（編集）

トイブックホームページアドレス http://www.toybook.jp 印刷所：図書印刷株式会社

トイ 製作管理 内山博之 ブック 執筆 坂口徳仁、杉山和繁 エディトリアルデザイン 有限会社ロケットパンチ MSイラスト 中村淳一 アドバイザー 岡崎昭行 撮影 スタジオアール、中村浩 撮影協力 月刊ホビージャパン パッケージデザイン 神田美智子（ブレインナビ）

編集協力 杉原克由、大矢直人（ブレインナビ） 監修 株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカ トイブック事業部の承諾を無しに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、梱包時における欠品及び破損は、小社品質管理室（03-5820-3743）までお送り下さい。送料弊社負担にてお取替えいたします。©創通エージェンシー・サンライズ

ISBN 4-902399-03-2 Printed in Japan, Made in China

NEXT ISSUE 次号予告

Vol.0005

GUNDAM OPERATION

A・BAOA・Q

TOY

コレクションフィギュア5
MS-14　ゲルググ
ビーム・ライフル装備、
シールド、中隊長用ヘッド付属

専用ジオラマベース

BOOK

ア・バオア・クー レポートvol.0005　―兵士編
連邦・ジオン両軍兵士の兵装、主要指揮官列伝、兵士の生活etc

2004年4月25日発売予定

第1シリーズ続々展開中！！6巻揃えれば「ラストシューティング」を表現可能！！

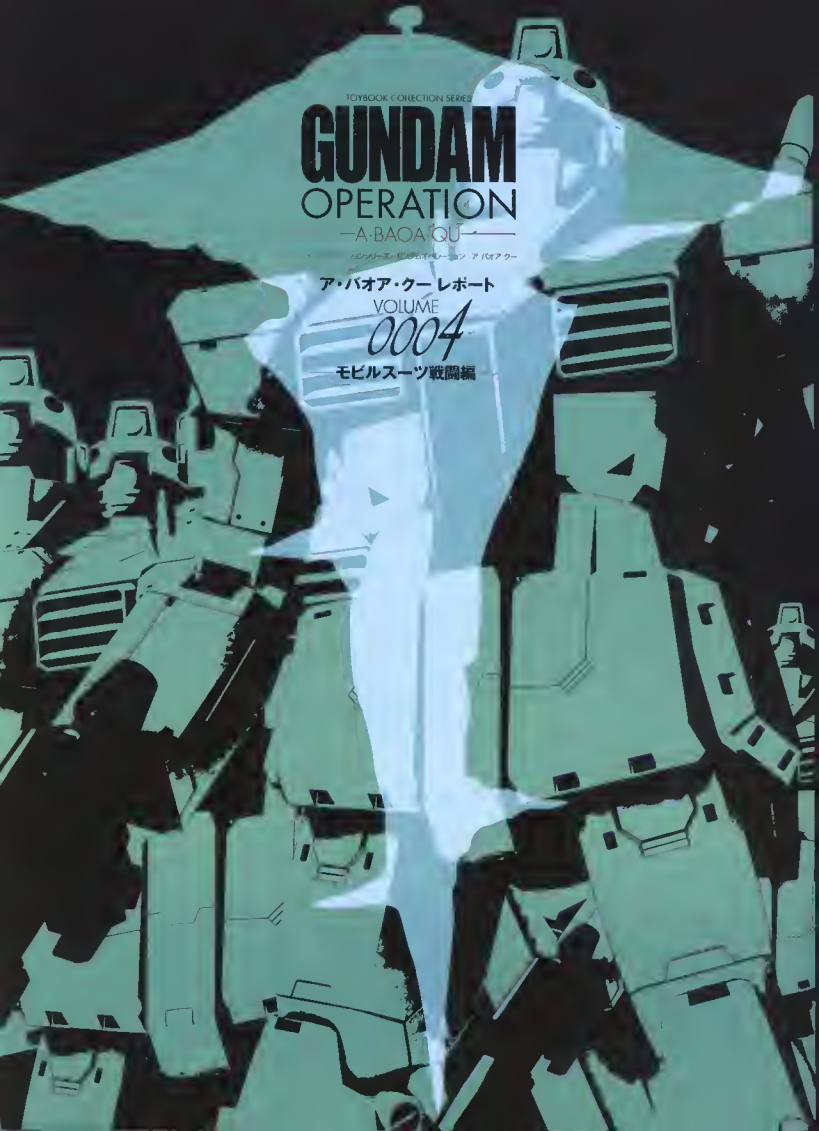
TOYBOX COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

—A·BAOA QU—

ガンダムオペレーション ア バオア クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0004

モビルスーツ戦闘編